

昭和五十二年十月十一日 〆講演

「新しい日本と青年」

皆さん、今晩は。前川塾長、あるいは理事長、あるいは皆さんと、随分と長い間のおつきあいをさせていただいております。和敬塾についても何度かお話を伺っております。私、おじやまをしたのは初めてでございますが、随分前から、お前一度来い、こんないいところはないぞ、というお話でございまして、今日は楽しみに参りました。楽しみにして参りましたけど、せっかくお招きをいただいたんですから、私も少し私が考えておりますことを皆さんに申し上げたいと思います。

明日は明後日の前日——党を飛び出す

私は先輩から、いつでも、ものは、できるだけ視野を広く、世界的視野で考えたほうがいいと教わってきました。しかし、この視野をずっと広げるということと同時に、明日、明後日、一年先、五年先、十年先を考えるとということが、やっぱり非常に大事だと思ふ。そこで特に申し上げたいと思うことは、非常に簡単なことですが、明日は今日の次の日だというよりは、

明日という日は明後日の前の日だ、と思ったほうがいいということなんです。

私は乏しい自分の体験から、今日いろんなことを申し上げたいと思います。随分悩んだり、迷ったりしましたけれども、それまで九年半自由民主党という政党におりました。この政党には良いところもあれば悪いところもあります。これの評価は皆さん方がなされればいい。私はダメだと思つた。これはなんとか直さなきゃいかんと思つて、私なりの努力はしたけれども、直らんと私は私自身で断定した。この断定が正しいか正しくないかは、もつと時間が経つてみると分からないけれども、少なくとも自分でベストを尽くしてみてもダメだということになったら、何をするかということを考えました。まあ、来年——ちょうど去年の六月というところキード事件で、田中さんが逮捕されるんではないかなんていう噂がちらほら出てきた頃ですが——このロッキード事件の処理がつけば、それと同時に自民党も新しくなる、あるいは日本

の政界も生まれ変わったようになる、という多くの先輩の慰留を振り切つて、昨年六月に私は党を飛び出しました。

新自由クラブ代表 河野洋平先生

たった六人で何ができるか。飛び出せば、翌日の新聞は確かに拍手喝采をするだろう。大勢は手をたたきけれども、そんな拍手喝采はたった一日のものだけ。一日の拍手喝采のためにお前はこれから先の人生を棒にふるつもりか、こう言つてくれた先輩もありました。しかし私は一日の拍手もいらぬんです。手なんかたいてくれなくていい。そんなことよりも、今何をするかということを、もつと真面目に考えてほしい。そしてなんとなくテレビを見てひっくり返つていけば、明日になつてしまふ。それは何故かといえ、明日は今日の次の日だからだ、と思うけれども、そうではなくて三年先、五年先に、あるいは明後日、われわれが住む社会がこうなつていなければならぬと思ふならば、明日は明後日の前の日だよ、今こんな状態なのに明日そんなには思い切つてできないよ、という

けれども、明後日こうなろうと思つたら、明日は少なくともこうなつてなければいけないと思ふべきじゃないのか。

昭和五十五年は国際的に極めて重要な年

私は昭和五十五年という年を非常に大事な年だ、というふうに数年前から思つてきていました。この昭和五十五年という年がどんな年であるかというのは、エネルギーの自給バランスからいっても、五十五年という年は非常にきわどい年になるだろう。あるいは国際関係からいっても、日米安保条約はまあ自動延長で、すつとなどはなしにずるずる行つていくけれども、昭和五十五年という年は改定安保の二十年目に当たる。そしてアメリカの経済状態は決して良くなつていかないだろうから、改定安保二十年目の年には、また安保フリーライド論というのがアメリカに出てくる可能性がある。それまでに日本がやつておかねばならない、あるいはその時に日本がどういう姿勢で日米関係に取り組むか、ということを実際に考えておく必要がある。

朝鮮半島に目を向ければ、韓国の近代化政策、つまりいろんなものを近代化していこうという政策が、一九八〇年、つまり昭和五十五年を目処に次々と進んでいる。そして中国は中ソ同盟条約というのを結んでいて、その中ソ同盟条

約の期限は一九八〇年にくる。この一九八〇年に、中ソ同盟条約を中国側はどう対応するか、ソ連側がどう対応するか、これは少し不謹慎な話になって恐縮でございますが、塾長にお許しをいただいで、少し乱暴な議論、少し私的な議論をさせていただきます。中ソの関係が今のような関係であるほうが日本およびアメリカは安心だと、ソ連とアメリカの力のバランスはもうちよぼちよぼだと、あるいはソ連のほうがいくらか上になつてきているのではないかと、という軍事評論家の説からいえば、そのいくらか上になつていくかもしれないソ連とアメリカと、そして微妙な関係にある中国というこのバランスが、今世界の均衡というものを保つているかもしれない。しかし、一九八〇年に中ソ同盟条約の期限がきて、まあこの同盟条約は皆さんもお調べになればわかると思ひますけれども、ほうっておけば三年とか五年とか自然に延長されて、そこで黙つているとチョンになると、まあいろんなことが書いてあるわけですから、でも、一つの目処として一九八〇年がある。

国内の経済問題の中にも今も申し上げたように、エネルギーを初めとして、一九八〇年、昭和五十五年という年を放置し得ない年になつてくる可能性がある。それなのに日本の政治の質というものは、ずっと下降線をたどりつつある。こんなことでもいいのだろうか。今そんな

に急には曲れないよとおっしゃるけれども、しかし確実に私自身が設定した昭和五十五年、一九八〇年という年は、確実にわれわれの前に近づきつつある。誰れかが思いきつてやらなきやいかん。そういうことが分かっているのに誰も思いきつてやらないのなら、気がついてる奴が思いきつてやる以外にない。そう思います。条件が整えばやる、条件が整わないなら条件が整うように努力するということが、当然ではないでしょうか。しかしともすれば、条件が整わなければやらない、なるべくやりたくないから、条件が整わないということをはじくり出してしかもその見ようとならない消極的な人間ばかりで、日本の国が今のようない国際関係の中で、一定の地位を保ち続けるとは私には思えない。全く微力だし、自分自身の力の限界をよく知っていますけれども、しかし何になるかということを考えないで、何をするかということに集中して考えれば、微力な人間も数人集まれば、相当なことができる。まあそんなふうにして、別に力みかえつてやつたわけじゃないんですけど、まあ始めたこの仕事です。大げさに言いましたけど、皆さん、まず最初に、明日という日は今日の続きだということよりも、明後日の前日なんだというふうに考え、そのためには明日少なくともこういう事をやつておかなければならぬという、そういう気持ちを心のどこか

に持つという訓練を、そんな訓練ばかり毎日やっていたらくたびれちゃいますけれども、たまにやってみていただきたい、ということをまず最初にお願いをしておきたいと思います。

原因と結果——結果だけ見て議論するな

もう一つ、最近とても気になることは、原因と結果、つまりどんなものでも、どんな結果でも、そういう結果が出るにはいろんな原因があるのだ。当然のことですね。ところが、こういう結果が出た、そうか、それじゃあ何をするかという時に、この結果だけを見て議論してはだめだ。いかなる原因が積み重なってこういう結果が出たのかということをや、やっぱり考える必要があるんじゃないのか。私は別に和敬塾に来て福田内閣批判をやるつもりはありませんけれども、一つの例として申しあげる。しかも私の考えている考え方として申しあげるので、どうぞ皆さん、皆さん方のお考えで、あとはいろいろ応用問題を考えていただきたいと思うんです。

不況と補正予算

例えば、今たいへんに経済状況が悪い、不況だ、だから補正予算を組むんだと、今やってみなすね、国会で。そりゃいい、不況だということにはよくわかる。だから補正予算を組む。しかし、

それじゃあ何故不況になったのかという原因を明確にしないで、ただ不況だから補正予算を組むんだということだけでは、やっぱり納得しない。納得できないものがあるんじゃないだろうか。もつと原因をきちんと探るべきだ。これがわれわれの補正予算に対する一番大きな不満なんです。

新党の続出

例えば、この間の参議院選挙前後で、まあ女性、婦人党ですか、女性党ですか、あるいは革自連とか新自くなんていういろんなのが出てきて、既成政党の方は、「なんか知らんが、雨後の竹の子のようにニョキニョキいろんなものが出てきやがって」ところおっしゃる。しかし、その雨後の竹の子のようにニョキニョキ出てくるには、出てくるだけの原因があるんですね。なんにも原因なしに出てくるんじゃないんです。何故出てきたのか、その原因を探るべきじゃないんでしょうか。その原因の中には、既成政党の中には吸収しきれない何かがあるんじゃないかとか、いろんな原因というものを探ってみることが大事なのに、ニョキニョキ出てきたよという結果だけをつかまえて、論評をする。それが自分たちにとって好ましいか好ましくないかという議論だけをしているのは、適当ではないように思いますね。

というのは九月の終わりぐらいに、田英夫という人が社会党を飛び出したんです。植崎弥之助、秦豊、田英夫、この三人が飛び出してどこへ行くか、いろいろ皆が見ている。結局、江田五月君といっしょになって、少しずつ膨れていくことになるんだろうと、だいたい落ち着く先はわかっちゃいるわけですけども、しかし飛び出すなんてあり得ないよと思っていた人たちからすれば、ありや飛び出しちゃった、さあこれからどうなるんだろう、ということになる。

大きく報道された小さな事件——

小さく報道された重大な事件

そうするとある日新聞に、田英夫は河野洋平と暮夜ひそかに会っていたらしいと出た。相手もつと美人ならともかくも、あんなのと会っていてもしょうがないと思うんですけども——別にここには田さんの親戚はいないでしょうね。田英夫と河野洋平といろいろ密談があったというのは、そりゃあつたことは事実なんです。で私も今だから自白しますけれども、田さんが離党する直前、いっしょにアメリカに行っておりまして、ワシントンで同じ会議に出ていて、三晩いっしょのホテルに泊っている話をしました。彼だけ党大会があると言って先に帰って、私はアメリカに残っていた。数日後に日本から電話がかかってきて、田さんが飛び

出しちゃった。ああそうか、まあしかたがないだろうな。そこで数日経って私アメリカから帰ってきた。帰って来ると羽田の飛行場で飛行機のタラップの下に、田さんからのメモを持ったお使いが来ていて、できれば飛行場で記者会見が終わったら、新聞記者諸君を巻いて、ホテルオークラへ来てくれないか、俺は先に行つて待つとすると。じゃあ行くこうつていうんで、行つて二人でいろいろ話してきた。まあ別に大した話をしたわけじゃない。しかし会つたことは事実です。

新聞には田英夫と河野洋平が会つたらしいとある。それから矢野絢也もいつしよに、と。まあ別の機会だけれども、こいつらと会つていいらしい。そういうことが連合政権、連合時代に入っていく一つのきつかけになるんじゃないか、ということが新聞でワアワア騒がれる。だけれどもそういう把え方というのは大した見方じゃない。私はこの間から新聞社の人の何人かに、あの新聞の追っかけ方、把え方というものは、まことに稚拙だ、幼稚だ、と言つた。同じその記事が出た日の新聞、あるいは翌日だったかもしれないが、新聞の一番下の段、広告の一段上のところに、ちっぽけに——これは一つの例ですから、皆さんにこういう話を申し上げるのは適當かどうかわかりませんけれども——埼玉県の草加の市長選挙の結果がちよ

こつと出ていた。この埼玉県の草加の市長選挙の結果は、今井さんという若い元市議会議員の人が、市長選挙に挑戦して当選しました。それまでの現職の議員は落選して、現職の市長が落つこつて、若い市長が当選しました。わずか五行ぐらいの記事が出ていた。私は新聞社の人に、河野洋平が田英夫に会つたとか、矢野絢也に会つたとか、誰に会つたとかなんていう話は大事なことじゃない。それ自体は意味を持たない。そんなことよりは、草加の市長選挙で今井君という若い候補者が勝つたということのほうが、本来はずうつと大きな意味を持っているんだよと言つた。そりやどういふわけですかというから、いや今井君の選挙は、現職の市長さんは、これはまあ政党政派はどれでもいいんですけどけれども、まあ既成の政党、名前をあっさり言つちやつたほうがいいんじゃないか、共産党と社会党が支持した市長さんです。その市長さんが二期やつて、二期の実績を引つさげて三期目の市長選に挑戦をした。それに対して、若い今井君という人は無所属です。無所属で皆に応援してくれないか、私はこういうことを考えているんだといって呼びかけた。その皆に呼びかけた中の一人に僕は入つたわけです。

私は応援に行きました。草加の駅前に行つたら、「河野洋平来る」と、予告篇みたいにならば貼つてある。あんまり大きく貼られると困る

なあと思ひながら、ひよつと向こうを見たら、向こう側の電信柱にはずうつと「江田五月来る」と、書いてある。ああ五月は向こうだなと思つてた。それで車の上がつつて、この人がいいんだと推薦して、草加の駅前の選挙演説が終わつた。次の駅前で、またやろうというんで、東武電車に乗つて次の駅へ行くまで吊り皮につかまりながら、江田君が向こうに来るのかと言つたら、いや、江田さんもこっちへ来るんですよ、ああそうか、君はすると何党なんだ、いや何党でもないんですよ、ふーん。これはほんとうにそうなんですよね。つまりその若い前市議会議員は全く無所属で自分の考えはこうだ、あなた応援してくれませんか、いろんな人に呼びかけている。江田五月君もよかるう、てんで飛んで来た。私も飛んでつた。いろんなのが飛んで来たわけです。いろんなのが飛んで来て応援した。新聞は、これはもうわりと体制的にできているから、現職のほうが強いと決めてたところが結果は大逆転して、この若い前市議会議員が当選した。

この結果は非常に重要な意味を持っている。それは、江田さんという、いわゆる社会市民連合といわれる人たちが、田さんも離党直後でガタガタしていたから来れなかつたけれども、彼も来ると言つた。かつて社会党にいた田英夫、あるいは、親父さんが社会党にいて自分は社会市

民連合をやっている江田五月とか、河野洋平とかいるんなのが、とにかく集まってワイワイ応援した。こういう候補者を草加市民の人は何の疑問も不安も持たない。ただ単に若くてエネルギッシュだから、という見方をした人もいるでしょう。しかしあるいはいろんなイデオロギーマに乗っかって、内部矛盾を起こすんじゃないかなんていう疑問を持った人はいないんだろっかと思っけれども、そういうものはないんですね。むしろ、いろんな人に支えられていることから来る安定感みたいなものを見つけたのかもしれない。とにかく理由はいろいろあるんでしようけれども、そうした様々な理由の結果は、彼が市長に当選した。それは何人かの男が東京のどこかで会ったなんてことよりも、ずっと大きな意味がある。そういう市民の心の動き、進み具合、そういうことをほんとうは皆が見抜くべきなんだ。ところがそういうものに対する配慮とか注意が非常に少ない。そして誰と誰と会ったとか、仲がいいとか悪いとか、そんなことではなくて、もっと大きなうねり、海の底から盛り上がってくるような動き、そういうものを誰が一番に感じとるか、ということが大切なんだ。そういうふうに私は思う。

党とは・保守とは・革新とは？

社会党だ、共産党だ、自民党だ、何党だ、し

よせんそんなものは、かりそめの姿にすぎないですね。そりやたままたまそういうサークルの中にいるだけのことじゃないでしょうか。もっとダイナミックにいろいろ動いていい、というふうにするら私は思います。俺は保守だ、お前は革新だ、なんてよく言う。私はその、まあこだわるようですけども、田さんという人はわりと好きで、昔から二人きりでよく一杯飲むこともあったし、テレビの対談で誰と対談したいかって言ったら、田英夫。向こうもまあ都合がいいのか、河野洋平とこういうもんですから、わりと二人の対談というのはテレビで何回もあつたんですが、その頃から田さんと私とは、あまり意見の違いがない。いつでも対談が終わる最後に、あなたが社会党にいるのが一番不思議ですよという、向こうも、お前さんが自民党にいるのは不思議だね、こう言ってテレビの対談がいつも終わる。今度、めでたいかめでたくないか知らんけれども、まあめでたくもそのお互いの不思議だけは解消したわけです。向こうも出ちゃったし、こっちも出ちゃった。

そこで暮夜密かに会った時にも、彼といろいろ議論した。いったい保守とは何だ。革新とは何だ。落ち着いて少し話をしなきゃいけない。そのアメリカのワシントンの会議の後、アメリカ人が百二、三十人集まる席で、頼まれて講演をした時にも、アメリカ人にとつても興味があ

るのは、やっぱり日本の政界は、保守逆転するかしらないかなんていうことにあるんですね。アメリカは保守逆転するかしらないかというけれども、保守とは何か、革新とは何かということの定義がなければ、保守がひっくり返るなんてことはわからないわけですから、あなたのいう保守とは何なのですか、あなたのいう革新とは何なのですか、まずその定義づけから議論しなければ、この議論は先に進みませんよ、とこう言うと、うん、それもそうだ、という。日本という保守革新とは、一体何をもって計っておるか、とこう言うから、まあいろんな人がいろんな言い方をする。人によっては自民党だけが保守で、それ以外は全部革新だ。そそっかしい人の中には、与党というものは保守で、野党というものは革新だ、と思っ込んでいる人もいる。しかしそんなもんじゃないと思う。まあ一つの見方、考え方は、短期的にも、中期的にも、長期的にも、究極においても、自由主義経済体制というものを目ざして進んでいこうという考え方、これはやっぱり保守というべきなんだろう。最近ばかりあえずはこのままでいいよ、中期的にもまあこのままでよかろう、しかし俺が天下を取ってマジヨリテイになったら、そうはいかないよ、とこういう革新といわれる人がいますね。つまり当面は、中期的には自由主義経済でいいけれども、やっぱり究極的には社会主

義経済がいいんだ、だから究極の目的は社会主義経済体制なんだという人たちと、究極的にも自由主義体制でいいんだというところで、分けるぐらいにしか分け方はないんじゃないか、とまあこんなことを言いながらアメリカで議論をして日本へ帰って来たわけです。

社会主義経済と国有化の問題(外国・日本)

ところで、社会主義経済とは一体いかなるものか。これはまあ、ソ連や中国の社会主義経済は若干修正され始めていますね、ソ連などは特に。これは塾長は私より遙かにご存知のところですけども、自由市場なんてできてきたり、一定の私有権なんでものが認められたりしかけてきていますが、本来の社会主義経済というのは、やっぱり私権、私的権利というもの、私有権というものを認めないで、国有化していく、あるいは計画経済でいく、つまり統制経済でいくということをして社会主義経済というんでしょうけれども、今日日本の政界の議論の中で全部国有化するんだという議論はもう全くないですね。ほとんどない。一定の部分を国有化しようという人たちの主張が社会主義経済の主張である、という程度にしか分けられないでしょう。

しかし皆さんもそれぞれご勉強されていますけれども、フランスの経済というのは一体ど

ういうことになっているかといえば、ルノーなんていう自動車がありますが、あのルノーという会社はもう国有化されている。それ以外にもフランスの経済はアルミニウムの関係とか、鉄鋼の関係とか、エネルギー関係で随分国有化されているものがありますね。先だつてのある人の調査、かなり権威ある日本の経済団体の視察団の調査報告を見ると、フランスの労働者の中で、全体の労働者の十三%が国有の企業に勤めていると報告していますね。全労働者の十三%が国有企業に勤めているフランスの経済体制を社会主義体制と呼んでいるかというところ、そうじゃないんですね。やっぱりフランスという国は自由主義国だし、自由主義体制で自由主義経済体制の国だ。誰も疑いなく言っているじゃありませんか。イギリスだってそうです。今イギリスの石炭、鉄鋼、みんな国有化されているでしょう。しかしイギリスという国の経済を社会主義経済とは誰も言わないですね。

今、日本の革新といわれている政党的経済政策の中で、全労働者の十三%が国有企業に勤めるほど国有化を進めようなどという大胆な提唱をしている政党は、ほとんどないんです。だから民社党や社会党は、おそらくヨーロッパへ行けば、革新とはいわれないかも知らない。フランスの経済構造、経済体制でものを見て、あれが自由主義経済体制なのだ、と何の疑念も

懐かずに思っている人から見れば——将来は別ですよ、将来は別だけれども——短期、中期に考えている社会党的経済政策なんてものは、フランスに持つて行つたら、これはもう随分保守的な経済政策ですね、あるいは随分われわれよりは緩やかなものですよといわれるかもしれませんね。つまり、これが革新、プログレッシブだなどとフランスではとても呼ばれない代物ではないだろうか。しかし日本では、それを称して革新といっている。つまり、しよせん言葉のあやでしかないんじゃないだろうか。それはもう、例えば人によっては、もう東京都内に個人が何千坪の大邸宅に住んでおるといふことに、やっぱり問題があるんじゃないのか。思いついた固定資産税の累進化、あるいは場合によれば、過密都市における一定の個人の住宅の面積の制限なんていうものだって、もうそろそろ考えるべき時期に来てるんじゃないのかってことを、これはもう自由主義、あるいはもつと言えば、資本主義経済体制の中でだつて当然考える議論にもうなつてきている。そんなに不思議でなく、そういう議論はある。あるいは場合によれば、エネルギーについての一部分は国有化、国がコントロールする必要があるかもしれないなんていうことを、通産省や大蔵省の議論の中にだつてそんな議論が囁かれるような状況の中で、今程度の議論で、俺は革新なんだ、

保守はだめだ、なんていう議論を言っている革新というものはこれで世界に通用するだろうか、あるいは、一言革新というだけで、やああいつら革新だから、中にいるとこつちが赤くなるみたいな議論しかできない保守というのも低能じゃないだろうか、という気がしませんか。

表紙でなく中味を——行間を読みとる

もっと様々な包み紙があるけれども、いろんな表紙の本はあるけれども、表紙で議論しないで中をめぐって何が書いてあるのか、しかしそのねらいは短期的なものだけではなくて、究極的に何を目指しているかということについてまで読み切る、あるいは行間の意味まで読み切るといふ努力をするべきじゃないのか。表紙だけ見て、ああ、あの本はもう読まない、作者だけ見て、ああ俺は嫌いだ、というだけではなくて、もっと見透して読み切るといふ努力がお互いになされるべきではないだろうか。お互いに表紙だけ見て、包み紙の色だけ見ていっしょになるのならないの、好きだの嫌いだという議論の時はもう過ぎていくんだというふうに私どもは思っているわけです。だからといって、私だけ、われわれだけがよくわかっていくわけでもないの、われわれだって随分わからない部分がある。人様のことがどうかなんていう以上に、自分たちがどう考えるかという自

分たち自身の整理だつて、もつとしていかなければいけない部分というのがあるわけですから。

塾生のみなさんに申したい

私が和敬塾の皆さんに申し上げたいのは、将来、つまり明日のことを考える。将来のことを考える。原因と結果の因果関係というものをよく考える。物事を上つらだけで議論するのではなくて、もう歴史的経過が一つ一つのものが持つ意味すら変えていっているという、そういう場面だという時代認識みたいなものをいつでも持つてほしい、ということをおは皆さんに申し上げたかった。たかだか政治に足を踏み込んでまだ十年、人様の前で偉そうな顔をしているんなことを言う立場でもありませんし、そんな能力も持つていないわけです。ですから、もうこれ以上そんなに偉そうなことを言うつもりはありませんが、しかし今申し上げたことだけは私の体験でしみじみ今そう思いながら、毎日を進んでいるわけです。これはぜひ何かの参考にしてほしい、というふうに思います。

国会は量から質へ

これから少し政治論をやりたいと思う。われわれは今の世の中はたいがい量より質の世の

中に変わったといつて間違ひはないでしょう。まあ量より質の時代になるよ、と大分前から言われて、今や、やっぱり量より質の時代に完全に変わってきた、と思うんです。ところが、どうもあの永田町にある国会だけは量より質じゃなくて、質より量なんです。いつでも質より量です。そりやまあそうなんだよ、多数決なんだから、民主主義なんだから、質より量だといふけれども、私はそうは思わない。民主主義であっても、量より質だと私は固く信じて疑っていない。そんなことを言えば、多数決の原則をお前は認めないのかというけれども、そうじゃない。つまり私が言おうと思つている量より質というのは、質のよい議論、正しい議論のもとに量が集まつてくるということが大事だ。今のうちに何もないところに、ただただ「この指とまれ」と大勢集めといて、一等多く集まつたやつがその後なんかものを言う。大勢集まつてるやつがものを言うのが全部正しいのだ、というのは、私は逆転している。量より質の時代というものためには、良質の議論のもとに、数が集まつてくる、という政治をやらなきゃいけない。それをやろうとすると一番問題なのは、今の政党というやつですね。

今、日本は政党政治ですけれども、この政党の存在なるものが一番困るわけです。例えば、非常に単純にいうと、ここに十人で構成する議

会があつたとする。これは政党政治だ。Aという政党に六人の議員が所属する、Bという政党に四人の議員が所属していたとします。ある法律案がかかった。環境整備の法案が出て来た。そこでこの環境整備の法案がぜひこの議会で通つてほしいな、こう思っている市民会議の人が、この環境整備の法案についての賛否を問いに、一人ずつのところへ聞きに行った。あなたこの法案に賛成ですか、反対ですか。B党に所属している人は四人とも、ああいいじゃないですか、賛成ですよ、と賛成した。次にA党に戻つていった。結構ですね、私も賛成します。それはいいことですよ、ぜひ賛成したい。二人は言った。ところがこの四人は、いやあ反対だ、まだその時期じゃないと思うから反対だとかなんとか言つて反対した。しかし、その市民会議の人は、一、二、三、四、五、六人が賛成している、反対は四人だからこれは誰が考えたつて六対四で賛成可決されるに決まつている。市民会議に戻つて、今度の法案は通るよ、六対四で通る、賛成者六人、過半数、ばんざい、やつたという。

党議拘束

ところがいよいよ本会議が始まる日になると、ちよつと様子が変わつてきた。今も申し上げるように、政党政治ですから、A党、B党が

各々が党は賛成か反対かつてことを言わなきやいけない。党議を決めなきやいけない。B党は簡単です。所属四人が全部賛成ですから、わが党は賛成だとすぐ態度が決まりますね。A党は四人反対、二人賛成、なかなか態度を決めるのは難しい。しかし、決めなきやいけない。多数決、四対二。A党は党議で、わが党はこの法案について反対。党議を決める。A党が党議で反対と決めたその瞬間に、この二人はやむを得ない、反対しなきや除名になつちやう。党議違反。党議違反。そこでやむを得ず反対、その結果は、反対六、賛成四でこの法案は否決されることになるんですね。一人ずつに聞いていたら確かに六人の賛成者がいたけれども、政党政治は党議で拘束されるということがある、ということですよ。党議でそう決まつたつて、この二人は賛成に回りやあいいじゃないか、というけれども、今日の日本の政党政治というものはそのういうことは許さない。全部党議決定で、党議で拘束されてこの二人も反対、つまり政党政治には一つのこういうトリックがよくあるんですね。

例えば、日本と中国の日中平和友好条約促進決議案なんていうものを提案しよう。共産党も社会党も公明党も新自由クラブもみんな賛成だ。自民党の中でも賛成なのが少しいるんだ。それを足しやあ過半数になるんだけど、そ

んなの必要ないつて言つてるほうが、この党の中では多いために、この人たちが全部賛成の意思表示ができない。これが政党政治の党議拘束による国会議員一人一人の主義主張が屈折する一つの例ですね。これはほんとうはおかしいんです。まあいくらおかしいと言つても、そうなっているから仕方がないんですが、こういうことを変えていかなければ、量より質の政治にならない。だから本来の政治は、やっぱり政治家一人一人の、政治的思想信条、政治的良心、政治的信念というものをもつと大切にすることゝいうことが大事じゃないのか。

姦通罪廃止法案審議の場合の先例

現に、過去にそういうことがなかつたかといへば、昔はそういうことがあつたんだそうです。私はそういうことは記憶していません。まだ私があんまり政治に興味を持たなかつた頃、日本の政界には、つまり党議拘束なんてものはしきれずに、自分の自由問題ですから、皆さん勝手に賛成でやつてくだささい、という頃があつたんです。例えば、戦前に姦通罪という罪があつた。この姦通罪というのは、皆さんよくご承知の通り、つまり女房が浮気をした時には罰せられるが、亭主が浮気をして罰せられることにはならない。姦通罪というものは妻の不貞を罰するというものですね。そういうものは戦前にあつ

たけれども、戦後日本は憲法改正で、男女平等となったから、男女平等なのに女房だけが浮気しちやいけないというのはおかしい。そこでこれは憲法と矛盾するから、姦通罪というものを廃止する、ということになり、姦通罪廃止法という法案が国会に出された。そうすると、そりやおかしいという議論、有力な議論が出て来た。

田中耕太郎議員の修正論

これはクリスチャンで、確か私の記憶が正しければ、田中耕太郎先生だったと思う。田中耕太郎先生は、男女平等も正しいけれども、だからといって妻の不貞だけを罰するのはおかしいから、この姦通罪を止めちゃうというのはおかしい。男女平等であるなら、妻の不貞も罰すると同時に、夫の不貞も罰すりゃいいじゃないか。そうすりゃ男女平等だ、と。男女平等の世の中だつて、不貞はよくないんだ。男女平等の世の中でも婚姻というものを考えれば、やっぱり妻は夫に、夫は妻に、各々道義的に責任を持つ。それなら妻の不貞だけを罰するという法案を男女平等にふさわしくないからといって止めないで、この法案を修正して、夫の不貞も罰するとうふう修正したほうが、姦通罪を止めちやうよりはいいじゃないか。なるほど聞いてみりやもつともだ。だけどそうやられると困るといふ奴もたくさんいるわけです。

しかし、クリスチャンの田中先生、こう大演説をぶち上げて、わしゃあ、廃案、廃止に反対だ。むしろ、夫婦共に不貞を許さずという修正案を出すと言いつつ出した。さあそこで、各々の政党は皆議論百出したわけです。そりやあれが正しいというのもしれば、てめえの都合で、この際廃止したほうが無難だという議論もあつたかもしれない。これはこの政策論じゃない。人間一人一人の倫理観の問題です。だから、これはなかなか偉い人が、いやまあこの際はこっちにしようなんていうふうにならない。足して二で割れというわけにもいかないでしょう。そういう時は、いろいろの議論が出て、にっちもさっちもいなくて、この際は皆一人一人の倫理観に基づいて、一人一人の信条に基づいて賛成する人は賛成してください、反対する人は反対してください、党としての意見をまとめません、党議で決定して党議で拘束することをあきらめます。こういう場面があつた。

この歴史を緋けば、その時社会党は本会議で賛成討論をやつたのもいれば、反対討論に出たのもいるんです。討論に一つの党から賛成討論と反対討論と両方が出ていたわけです。だから、そりやもう賛否はバラバラになる。そうやってその一つの法案は、まあこれは結果としてなくなつちやつたわけですけれども、そういう議論をしたという、かつての事実はあるわけです。

審議方法の改善

なにも政党が党議で拘束して全部が全部こう縛りつけ、括りつけなくたっていいんじゃないか。しかしまあそういつても、そんなら選挙の時に何党公認候補というのもおかしいし、何々党だから入れたのに、党議で縛らないであつちへ飛んじやつたり、こつちへ飛んじやつたりしたんじや選びようがない、という議論もあるでしょうね。そこで、これから新しい体質の国会というものが造られなきゃいかん。それを造るためにはもつと皆の英知が必要だ、ということになつてくるんです。

だから例えば外交論とか防衛論とか教育論は一致しても、それ以外のものは自由課題にするとかですね、原則として自由課題だけれども基本問題について、国連なんかでよくやりますよね、重要事項指定方式なんです。重要問題だけは党議で決めようというのか、あるいは原則として基本問題は皆で討議して決めるんだけれども、どうしても決まらない場合には、やっぱり本人の思想信条に従うことが正しいと行くのか、とにかく馬鹿の一つ覚えみたいに、なんでもかんでも抑え込んでこれで行くという今のやり方、しかも十分に議論した結果ではなくて、いいかげんな議論、場合によれば議論もなしに、これは賛成、これは反対なんという行

き方にはとてもついていけない、というのが私の気持ちだ。

外交条件

例えば、外交案件なんていうのは、いざそういう議論に加わってみると、非常に難しいですよ。例えば日本とアメリカ、あるいは日本と韓国、日本とインドネシア、日本とソ連、まあ、あちこちの国と条約を結びますね。条約を結ぶ前に、法の定めるところ、外交は政府の権限でやってもよろしい。やれるんじゃないかって、やってもよろしいと書いてある。そこで、政府間で相手国の政府といろいろ詰めて合意ができるよ、外務大臣が行ってきつと署名するわけですね。たいていの条約は、大臣が行って署名をして、それをその両国が各々持ち帰って、国会で承認を求めて、両国の国会が各々結構ですよと行って承認をすると、初めてそこでその条約が効力を発する、とこういうことになる。

ところが、私は九年半与党議員で与党に所属をしておりますと、与党の外務大臣が署名して持つて帰って来た条約は、別にこれは与党議員と相談があつてやつてるわけじゃないんですね、外務省が相手国の外務省とGGベース(Government Government)で議論をしてサインして持つて帰って来て、初めて与党に説明がある。ちよつと待て、これはまずいじゃない

か、仮にそういう所が出てくるかもしれない。出てきていくら議論しても、条約というものは修正できませんよ。政府をいくら糾弾し、糾明したつて相手国との約束事だから、ここのはちよつと直しましよなんてわけにはいかない。だからこの条約の批准、承認は、*all or nothing* です。賛成か反対かしかないんです。ところが署名をした大臣が与党なんですから、

我が党の人が大臣になつて署名しちやつて来ている以上、党議拘束でそれについては反対の態度はとれない。修正も申し出られなきや、反対もできない。知らないうちに大臣だけが署名して帰つて来る。これが自分の政治的信条や政治的信念と随分違つたものだったら、私は一体どうすればいいんだ。その条約案件の承認については、何度か随分自身悩みました。しかし与党議員であるということだけで、なかなか何もできない。時には、えいちくしょう、この国会ではこの条約を承認しないために、少し引き延してやれと、与党のくせに引き延しをやつたりなんかしている。そして時間切れでこの国会ではだめと言うと、ああよかったと思う。しかしいくら引き延ばしたつて、社長がサインした手形みたいなものだから、社長が首切つたつて、その手形だけは生き残つていくわけですから、次の国会にまた出て来る。延ばしたつてまた出て来る。いつまで経つたつてそれは出て来る。

これどうにもならないですね。もつともつと与党、あるいは立法府というものが、この主体性というものを持てるように、そういう国会にしなければだめなんじゃないのか、と何回も思いましたね。今の国会というものは、極端なことを言うと、一つのセレモニーの場程度にしかなくてないんじゃないか。

公共事業

例えば経済政策もですね、景気が悪いと、さあどうする。まあ今度は公共事業でやりましよう、馬鹿の一つ覚えみたいなもんですから。景気が悪いというと政府がやるのは、公共事業を増やすのと金利を下げるのとの他は知らないんじゃないかと思うけど、何回でもそれをやる割と成功するもんだからいい気になつていゝんですけれども、その内そうはいかなくなると思う。

例えば今度も昭和五十二年度はこの不況に際して、一般会計予算、財政投融资合わせておよそ十兆円の公共事業をやります。十兆円も仕事をやるんです。公共事業つて一体なんだ、という、道路、港湾、下水道、住宅、そういうものをドツと造る。十兆円の工事が全国であれこれできるから、そして政府が十兆円のお金を払う。十兆円の工事が町中へばら撒かれる、そして景気がよくなるから、いいという。しか

し公共事業なんてほんとにそんなものだろうか。財政学をやったり、いろいろやっておられる方々があるところで、こんな話をするのも少し図々しいけれども、私ら国会議員の生きた議論の中から公共事業についての私の印象、感想を申し上げます。

例えばここにA村という村がある。ここにB町という町がある。このA村は苺の産地だ。ビニールハウスで苺がたくさん取れる。このA村はここで取れる苺を箱に詰めてB町に持って行って売る。それで現金収入が割といい、そういう村がある。ところが困ったことに、運が悪いくことに、A村とB町の間には大きな川が一本流れている、そこで取った苺をトラックに詰めてこの橋を通ってB町へ持って来るのものもすごく距離がある。ずうっと川下まで行かないやいかん。そういう条件なので、A村の苺は、例えば市場に出すためには、明け方二時三時に起きて苺を摘んで箱に詰めてトラックで、ずうっと回らなきゃいかん。労働条件は非常に苛酷だ。朝早く、しかもずうっとトラックで持って行くもんだから、傷みもある、鮮度も落ちる、運賃も相当かかる。こんな地理的な悪条件ではB町の人もどうもあんまりハッピーじゃない。そこで、ここに橋を架けたらどうだ。これはもう市役所か県庁に陳情して、ここにぜひ橋を架けてくれという。橋を架けるとどういうこと

になるかという、A村の人は三時に起きて苺の出荷をやらなくても、五時で十分間に合うようになる。あるいは六時でも市場に間に合う。労働条件は非常に緩和されますね。楽になるからビニールハウスをもう一棟作ろうか、ということになりますね。あるいは、苺だけじゃなくて、今度は無花果をやってみるか、自分の好きなものばかり言っているわけですけども、柿を植えてみるか、みかんをやるか、つまり次の収入源を考えることができるようになるわけですね、労働条件が緩和されるから。しかも、近いから比較的新鮮で傷みの少ない苺がもって行けるから、値が通る。運賃が安いんですから、トラック屋さんだけが儲らなくなるかという、そうでもない。トラック屋さんはここをピストン運搬すりゃいいんです。前は一回しか行かれなかったのが、今度は三往復ぐらいできるかもしれない。B町の人も鮮度のいい苺を運賃が安いから比較的割安で手にはいる。これで両方ともハッピーですね。この橋を架ける仕事が公共事業として質のいい公共事業じゃありませんか。

今のあっちこっちで行われている公共事業の話は、そうじゃない。こっちで苺を取っていて、こっちで苺を食いたがっているかどうかなんてこと、関係がない。十兆円分だけここに橋を架けたり道を造ったりすれば、工費がA

村に落ちたりB町の人を潤すから、A村も景気がよくなるぞ、B町も景気がよくなるぞという話なんです。ほんとうの公共事業というのは、十兆円の工費がばらまかれることによって、A町B町の景気がよくなるのか、A村の人たちのパートの働き口ができて所得が増えるなんてことが、公共事業の大事どころじゃないのか。もつとほんとうに必要な部分、つまり公共事業が完成した暁に、その橋の両側の人たちがどれだけのメリットを得ることができるか、工費によるメリットじゃなく、その橋ができたことよってビニールハウスがもう一棟できるのか、無花果が柿が穫れるのか、それによって収益が上がるのか、あるいは苺がもつといい採算点を見つけることができるのか、こういうことが本来の公共事業の議論ではないのか。だから公共事業というものは、ほんとうは金額、分量で議論するんじゃない、それをどれだけ行なうことよって、どれだけの利益が各々のかかり合っている地域にもたらされるかというもつと大事な議論、真面目な議論としてあるべきだ。ところがどうもそんな議論が行なわれない。少し雑な議論、大ざっぱな議論ばかりやり過ぎているんじゃないだろうかという気がしてしかたがない。

行政改革

最近国会で議論されて、新聞の見出しになっているのは、一つは行政改革をやるのかやらないのか、という議論であります。行政改革というの、前から僕らはやるべきだと言ってきた一人なんですけれども、行政改革をやったりやるならば、少なくともそれをやることによって、少し無茶な言い方かもしれませんが、相当大幅に役人の数を減らすことができるのか、あるいはお役所へ何か戸籍謄本を取りに行く、あるいは国有地の払い下げのお願いに行く、あるいは橋を架けてほしいと陳情に行く、そういう人たちがとても効率よく、わかりやすく作業ができるようになる、なにかそういう意味がなきやだめですね。ただなんとか省から一局減った、局は減って局長はいなくなっただけど、審議官が増えた、なんていうのは行政改革とはいわないんですね。看板を塗り変えただけなんです。そんな行政改革などはいくらやっただって意味がない。そうではなくて、もっと思い切って簡素化、効率化、そういうものが行なわれる必要があるんじゃないのか。

私は随分前から行政改革について主張してきましたら、私の先輩が一ぺん話をしてやろうといっているんな話をしてくれた。その先輩は昔内務省におられた先輩なんです、その先輩議員が当時いた時の話です。今でも農林省とか、建設省とか、大蔵省というように、その省という

字はどういう意味かと言えば、「省略する」あるいは「省く」という意味があつて、心して簡素化の努力をしない限りどんどん増えていってしまう。そういう流れをいつでも省いていく。あるいは反省する。そういう戒めの言葉だと思つて受け止める、と俺は内務省に入つた時に言われたよ、という話をしておられました。

やっぱり今役所は大きくなり過ぎてますね。大きくなり過ぎた役所というのは、これはなんとかの理論ですね。皆さんが好きでよく読まれるんとかの理論というのがあるでしょう。戦争が終わつた後、戦つていた軍隊を縮小しなきゃいかん。戦つたままの軍隊の数で平時もそのままやつていこうとすれば、必ず国は疲弊するし、出ていった連中は老齢化しちゃうし、次の戦いの時には一番弱体化してしまう。戦いが終わつたら思い切つて軍隊というものは縮小して、また戦わなきゃいかんという時にまた新しいエネルギーを注入して増やすべきだ、と。ところがいつでも戦つた国というものは、戦争が終わつてもそのまま縮小することができない。広げっぱなしで、これでいけば、軍事的には皆が我慢してそれを思い切つて支えるけれども、いつまでたつてもそれを広げっぱなしでいけば、国力はだんだんその負担に耐えかねて疲弊していく。そしてそのまま戦つた時のメンバーをずっと維持していけば、その人たちは年

をとつて老齢化してしまう。いざ戦いという時に、皆杖をついて出て行くことになる。そこで戦いが終わつたらバサツと縮小して、やる時にはまた新しい血を入れる、ということですね。なければならぬという議論がありますよ。なんでも同じことです、と私は思う。しかし自分は何もしないで、自分が汗を流さずに、自分が自らの体を切らずに、役人だけ数を減らせだとか、役人だけどうだとかなんていう議論も、これまた私はあんまりいい議論だと思わない。

先ず国会自体の議員定数減

だから、結局、立法院だけが国民に代わつて行政府をチェックすることができるとか、行政府がぶざまな形でどんどん大きくなつて、行政改革をやらなきゃだめだなんて繰り返す言わなければならぬ立法院は、まず自らを反省しなけりゃいかん。

そうすると、今日の立法院は何を反省するか。私は、本心を言えば、役人の数も多いけど、議員の数はもつと多いと思う。こんなに日本に議員なんてものが要したと私は思わない。国会議員にしても、なんとか議員にしても、もつと少なくてもいい。一人や二人じゃ困りますけど。例えばアメリカの例をとつてちよつと考へてみて下さい。面積日本の数十倍、人口も二億何千万、倍以上の人口のあるあの五十州から成る

アメリカの上院議員の数は何人いますか。百人でしょう。日本の参議院議員はもうすでに二五二人いて、もうちょよと増やさないとだめだ、増やす時期を虎視眈眈と狙っているんです。しかし、あのアメリカでも百人でやれる。むしろ百人しかないアメリカの上院議員がいかに権威を持ち、質の高い議論をしているかということ、われわれはやっぱり学ぶ必要があると思いますね。下院議員だってそうですよ。日本の衆議院議員に当たる下院議員だって、正確な数字は私はよく知らんけど、三百人か四百人です、調べてみて下さい。日本の衆議院議員は五一人人でしょう。こんなに要らないんじゃないですかね。偉そうな顔をしてバッチだけ付けて、うろろろするばかりで、もつと議員の数なんて思い切って減らしていいと思いますね。もう、なにも外国のまねをするという意味じゃないけれども、もつと思いつて数を減らしてその代わり少なくともすりゃ質はよくなるんですから。和敬塾だって四百人だから質がいいんじゃないですか。四千人入れてごらんない、質は下がるに決まってるから。もつと数を削って質の高いレベルの高い議会というものを持つ必要がある。立法府がまず自らの改革を主張し、断行すると、それは行政改革なんてものはわけなくやれる。迫力が出てくる。自分は心ではもう少し増やそうと思っていて、そして政府に

対してだけはもつと減らせなんて主張したって、これは説得力ないですよ。僕らにはもう行政改革は当然で、同時に立法府の改革を自らやるということがなければおかしいということをかねてから言っているわけです。これを半分に削ったら、私も削られるほうにはいるかもわからんけれども、それはもうその時でやむを得ない。そう思つて、断行するということを主張しているわけです。なかなか僕らの言うとおりにならないんで、歯痒いんですけれども。地方の市町村の議員は随分減っているんですよ、増えているところもありますけれども。昭和三十年頃から比べると、議員の数が半減した市などもあるんです。それでもちゃんとやれるんです。むしろそのほうがうまくやっているんです。多けりやいいつもんじゃないんですね。やつぱりそういうきちつきちつと一つずつ詰めた議論をしていきたいと思つている。これはクロスワード・パズルみたいなもので、どこかを解かないとなかなか次々と解けていかないんですけれども、まあこんなこともやつて見たい。

質問の通告を受けない大臣は

予算委員会のヒナ段に並ぶ必要ない

ところで、皆さんがテレビのチャンネルをひねつて見たいと思つている人はあんまりないでしょうけど、間違えてひねつて国会中継なん

か見る人が時々いるでしょう。最近あの予算委員会の中継なんてやっていますが、あれはもう何回も議論する。私どもも予算委員会で質問する。僕らのところは西岡君がやるんですが、私も総理大臣と大蔵大臣と外務大臣と文部大臣に質問をするんです。これは前の日に通告するんですからね。こういう人に、しかもこういうことを聞くよということは大体言うわけですよ。全部は言わなければいけません、大体のことは言っておくわけです。それなら聞かれない人は座っていることないじゃないですか、用はないんだから。例えば、運輸大臣が朝から晩まで何も聞かれないけどあそこに座っていると、運輸大臣としての仕事はいつやるんでしょうね、それは夜なべにでもやっているのでしょうか。質問がある時には腹が痛いなんて家へ帰っちゃうと困るけれども、質問がない時は運輸省に戻って、成田の空港はどうかなんてことを考えているほうがずつと気が利いているんだ、ほんとうはあるいは国鉄運賃を上げるか下げるかなんてことを考えているほうが気が利いているんです。四人にしか聞かないのに十六人も十七人も全部並べてやつてるなんていうのは、第一、非能率です。だつてそうでしょう。今も言ったように衆議院議員というのは五一人人いて、予算委員会の委員は、その五一人のうちの五十人だけなんですから、あとの四六一人は、質問を

やっている間やる事がないもんだから、テレビを見ています、勉強してる人もいるけども。そしてこの五十人で十六人全部ハイジャックしているようなもんです、出さないから。四人にしか聞かないから、あとの十二人はご自由にしてください。役所へ帰って仕事をしてください。でも結構だし、あるいは文教委員会をやるならそっちへ行ってくれてもいい。質問がないなら運輸委員会を開いて運輸大臣はそっちへ行つて議論してくれてもいい。

別に予算委員会というのは、上部委員会でもなんでもないんですから。本来予算委員会というのは、予算の、しかも支出の部分について議論するという委員会なんです。聞いてりや支出について聞いている奴なんていないですよものね。全然違うことだけ聞いている。もつと社会労働委員会もあるんだし、建設委員会も農林水産委員会もあるんだから、そういう委員会全部開いて、予算委員会で答弁しなければならぬ仕事のない人は、党外委員会へどんどん出て行って、専門の委員会でも国鉄運賃の問題もやるし、健康保険の問題も並行して委員会が開いてやってくれれば、ずつと能率はいいんです。あんなに非能率、不合理なことをやってりや、行政改革なんてできないと思いますね。それを止めると何回言っても止まらない。前例です、慣例です。前例と慣例に縛られてたら、前より良くは

ならないですね。

今日出海さんの言

今日出海(こん ひでみ)さん、あの今東光さんの弟で、フランス文学者の今日出海さんは、文化庁の長官を前やつておられた。私はその当時文部省の仕事をずつとしていたことがあるのでよく知っているんですが、日出海さんは自分で文筆家のくせに「河野さん、私はね、子供が本を読んでいるのを見ると、いやあな気がするんだ」と言われた。「どうしてですか?」「そりや本読んでいるうちはその本を書いた奴より偉くなることはまずないんだから。なんにも読まない時には無限大に偉くなる可能性がある。本を読んだる時には、ああ、あの程度にしかならないって思う。だからといって全然読まなきやダメですよ。だけれども読まない時間というのがやっぱほしい」というんですね。こりやもう皆さんに申し上げる言葉じゃないでしょう。今さんと私が議論した時は幼児教育の議論をした時の議論です。

今さんは、よくおふくろさんが家で子供に「もつと本読みな、そんなところでひっくり返ってゴロゴロしているくらいなら本読みなさい」。今さんはそういうんですね。本を読んでいるとおふくろつてのは機嫌がいい、原則的に本読んでないとなんか心配で、三日も本読まな

いとお医者さんに連れて行こうかしらと思ったりする。けどほんとうは、本を読んでない時間というものが大事な時間であるかもしれない、という理解が必要だつてことを、文筆家の今さんはさかんに言いました。

今さんはこうも言いました。「私は小説家だから、なに、これを書こう、心に決めてペンを持ったらもう升目を埋めるのはわけない、スルスルと。問題は何を書くかを迷っている時が一番問題なんだ。だから、明日が締め切りだということが終わっていても、何を書こうか、何を書こうか、こう考えてイライラしながら、窓の外で松の木が一本あつて、雀が来たりしているのを見ている。何十年も連れ添った女房なのに今だに襖をパツと開けて、お父ちゃん、明日が締め切りなのに、雀なんか明日見なさいという別に俺は雀を見ているわけじゃない。何を書くかを考えているんだからと言っけれども、やっぱ人間というものは考えてる事を理解するのはなかなか難しいものですな」と、今さんは言いました。お互いにやはりもう少し考える必要があると思う。

ダヤン氏との対談

たいへん長い時間おしゃべりをいたしました。最後にもう一言しゃべってやめます。この間アメリカへ行っていましたら、ちようどイス

ラエルからダヤンという今のイスラエルの外務大臣がアメリカへ来てました。それであつと思ひ出したんですけれども、三年ばかり前にダヤンがおしのびで日本に来てたことがある。あいう人は表立って歩くのと襲撃されたりするといふんで、割とおしのびで歩くことがある。そのダヤンが日本へ来た時に、たまたま私はいっしょに飯を食う機会がありました。ホテルの食堂でほんとにたまたま並んで座っちゃって、そしてダヤンかと言ったら、そうだ、という。まあ片言混じりで苦労していろいろやっただです。その時に私がダヤンに苦心惨憺して聞いた質問がある。何かつていうと、他国の、つまり外国の力によって自分の国が守られていると、つまり自らの国を自ら守られないで外国の力によって守られていると、その国の青年の愛国心というものはなくなってしまう、という説があるけども、お前はそれを *agree* するかと、こゝろ聞いた。多分通じたと思うんだ。ダヤンはノーと言ったんですね。俺はそうは思わないってね。愛国心というものは、自らが鉄砲を持って守れば愛国心が出てくるけれども、守らなければ愛国心が出てこないというものだと思わないと言ふんです。ダヤンは、愛国心というものは、その国の美しい景色、たまたま、あるいはその国が誇るべき技術とか、学問とか、伝統とか歴史、文化、そういうものが愛国心とい

うものを育むのであつて、ただ単に鉄砲を持って俺は自分の国を守ったからといって、愛国心が生まれると決めつけることには俺は反対だ、とダヤンは言いましたね。

ダヤンというのは今、ご承知のとおり、おそらく世界で戦争させたら一番強い、戦争の好きな人でしよう。だつてそういう笑い話があるじゃないですか。

ある日曜日の朝、うーんこゝろ退屈しながらダヤンともう一人の偉いのが会つたというんですね。「おい、ダヤン。今日は退屈だから戦争でもやるか」と言ったら「よかろう。だけど午後はどうする」とこゝろ聞いたという話があるんですね。そういう笑い話があるくらいダヤンという人は戦争が好きで、パワーポリティックの権化なのかと僕は思つてたもんだから、そう聞いてみたら意外にダヤンから「ノー」と言つて、今のような話が出たので、私は実は感銘したんです。

そしてダヤンはさらに言葉を続けて「戦いによつて解決するものなどあり得ない」と言いましたね。「戦争によつて問題が解決するなんてことは、絶対ない。問題を、国際間の問題を解決するのは話し合ひだけだ」と、きつぱりダヤンは言った。そのダヤンの言葉は、私には非常に強いショックを与えた。私は議員生活十年、出た時から割と、別に軟派だからじゃないんで

しようけれども、ハト派といわれ、私はパワーポリティックスというものをあんまり信用しなできた人間です。私はダヤンの一言がとてもジーンときた。こんなことはあんまり言つたことはないんですけども、私は若い皆さんにその言葉を信用しようとかなんとか押しつけがましいことをいうつもりはありません。しかしダヤンをしてそういう台詞を出させたことがあつたという事実を客観的に皆さんにお伝えして、これから先皆さんがいろんな場面でのんな議論をなさる時に、もし思ひ出していただけたら、そういう議論、そういう意見というものがあつたかなということ、どこかに頭の片隅に置いて思ひ出していただけると、たいへんありがたいと思います。

みなさんが目的意識をもつた人生を

少し長話をしすぎました。申し訳ありません。たいへん長時間おしゃべりをさせていただきました。おしゃべりこそ私の唯一のストレス解消法です。皆様方に、これからますます目的意識をきちつと持つた人生を歩まれるようお願いをして、私のおしゃべりを終わらせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が
用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、
当時のままといたしました。